

優秀賞 高学年の部  
小さなお母さん

静岡県  
浜松市立曳馬小学校 六年

北 実怜

「もーみーちゃん何やってるよ！」

ああ、また侑ちゃんを怒らせてしまった。怒らせたくて、怒らせている訳じゃないのに、いつもこうなってしまう。私には、中学三年生の姉がいる。私は、姉である侑ちゃんが大好き。でも、いつも失敗ばかり。「みーちゃん、電気つけっぱなしだよ！」「もーなんで、一人で留守番嫌がるの？」「またごはんこぼしてる」。毎日、毎日、侑ちゃんは私にブツブツ。でも、言いながらも、私を助けてくれるやさしい侑ちゃん。それなのに、今月も怒らせてしまった。

侑ちゃんは、私の小さなお母さんだ。うちには、父がない。父は、私が4歳の時事故にあい、亡くなってしまった。あの日から、母が父のかわりに働きた。まだ小学2年生だった侑ちゃんは、あの日から私の世話をしてくれるようになった。仕事で帰りの遅い母にかわって、夕飯をお皿にいれたり、片付けたり。お風呂に入ってくれたり、宿題もみてくれた。私が一人ぼっちにならないように、お友達と侑ちゃんが遊ぶ時は、いつもうちで遊んでくれた。小さかった私には、侑ちゃんがしてくれる事が、どんなに大変な事か、わからなかった。それどころか、私は何も考えず、年を重ねても自由気ままにしていた。友達の家遊びに行ったり、家の事は相変わらず、侑ちゃんに任せ、お手伝いもしないで、ごろごろしていた。ある時、「いい

よね、みーちゃんは。好きな事出来て。私なんて……」と言うと、侑ちゃんは声を詰まらせ部屋に閉じこもってしまった。私は、何を言われたのかわからなかった。そして、今までの生活を考えて、やっと気が付いた。そうだ。今まで侑ちゃんは、自分の時間を私の為にたくさん使ってくれてたんだ。それなのに私は、大きくなって、それが当たり前と侑ちゃんに甘えていたのだ。そう思うと、自分が嫌になった。恥ずかしくなった。涙が、いっぱいあふれてきた。大泣きをしている私に母が、「侑ちゃんね、パパが死んじゃった時にね、泣きながら、「みーちゃんね、かわいそうだ。侑歩は、八歳までパパといれたし、遊べたけど、みーちゃんは、まだ四歳だよ。まだ赤ちゃんだし、パパの事も忘れちゃうよ。かわいそうだよ。侑歩、みーちゃんにいっぱい甘えさせてあげる」って言ってたんだよ。お姉ちゃんは、実怜の事が大好きなんだよ」と、そっと教えてくれた。私は、胸が熱くなった。本当に素敵な姉をもっているんだと思った。ますます、侑ちゃんに感謝の気もちでいっぱいになった。ありがとが、あふれた。

「みーちゃん！」  
侑ちゃんが、大きな声で私を呼んでいる。私は、侑ちゃんの花顔が大好き。侑ちゃんの妹に生まれてこれて、本当によかった。